

神経現象学リハビリテーション研究センター 東洋大学

遂行的記憶

2014/12/13

東洋大学文学部哲学科
河本英夫

基礎的事項1

- ・ 宣言記憶: それとして想起し取り出せる記憶、意識の対象となり、部分的に意識の制御がかかる記憶
- ・ 意味記憶、エピソード記憶、像記憶(ゲーテ、寺田寅彦、カワモト)。意識による想起の対象となり、想起しないという選択肢がある。原初の区別は、初認/再認(感触)、二次的区別は、類似/非類似、三次的区別は、想起像の再構成、記憶そのものの再組織化を行うことができる。
- ・ 非宣言記憶(総称): 何かのきっかけで起動し、一まとりの行為が作動し続ける。そのつど現に作動する記憶であり、意識による選択肢がほとんどない。眼前の直接像を非宣言記憶だとする見解もある。作動する記憶の単位があり、そのまとまりを途中で停止すると、過度の緊張が出る。
- ・ 記憶の機能: 登録・保存・呼び出し、登録・保存障害(健忘、非登録、喪失)、呼び出し障害(想起障害)
- ・ 複雑な障害: 過去に行ったことのある場所を想起して、間違いないそこにいったことがあると想起できても、実際にその場所に行くと、初めてだと言う感触がある。

基礎的事項2

- ・ 非宣言記憶のうち、運動や動作、働き(思考すること、計算すること)、身体内感(感触)、情動・感情は、想起のさいに異なるモードとなる。
- ・ 眼前の風景のうち、どこまでが知覚でどこまでが記憶に支えられているかを区別することができない。今実行されている行為のなかで、どこまでが記憶に支えられているかを区別することができない。(事象のなかで記憶を単独で取り出すことはできない)にもかかわらずすべての行為や認知に伴っている。随伴的固有領域である。
- ・ 記憶の蓄積は、ダムに水が溜まるようなものではない。記憶の呼び出しは、保存されているものを呼び出して使う、ということではない。想起は、そのつど再組織化をとまなう。感情の想起にさいして、同時に過去の感情が作動する。怒りの想起は、再度今怒るのである。そのとき進行している感情の周辺の場面に言語的語りを導入する。それによって感情(およびその発生場面)を認識(自己認識)すれば、経験の局面が変わることをフロイトが活用した。とこでなぜ局面が変わるのか。

非宣言記憶

- ・ 過去の激怒した場面を思い起こしたとき、感情はそこで作動するので、非宣言記憶である。それを言語的に記述することは、実際に効果があがる。感情の作動には、それが動いていることの感触(感じ取り)がある。猛烈に怒ったのか、ほどほどに怒ったのか、小さく怒ったのかはおのずと感じ取られている。この感じ取りが感情の作動への調整能力となる。過去の感情の想起にさいして、言語的記述は、作動している感情に隙間を開き、調整の幅を大きくする。
- ・ 作動のさなかでの感触の感じ取りは、それとして記憶され、感触として想起することもできる。感情にかかわる言語的記述は、感情の動きを連動して(カップリング)再組織化し、調整能力の場所を開き、気づきを詳細に区分していく。
- ・ 動作不全の場合でも動作の感触は残っており、しかもこの感触と障害後の動作には対応関係がない。感触は想起できても、どうすることなのかわからない。

動作1

- ・ 動作の諸要素は、(1)身体行為、(2)動作の内感、(3)身体力感、(4)動作のさなかの気づき、(5)触覚性感覚知覚、(6)緊張、(7)快不快、自然-不自然さ、(8)環境知覚的要素等々となる。(9)動作にかかわるイメージの運動 (1)身体行為には、身体構造に由来する運動の要素単位がある。この単位を反復する。このまとまりは、人為的に分割することはできない。また途中で分割されれば、強度が出現する。活用可能な身体部位でのエネルギー-最小に整合化されている。歩行でも二輪歩行か一輪歩行かで、エネルギー-最小は異なる。(2)動作には、こんな感じという触覚性感覚がともなっている。階段を登るさいには、こんな感じで登れば、すつと上がれるという感じが伴う。これは動作制御の調整要因となる。動作反復のさいの反復の感触もここに含まれる。自宅の階段をいちいち何段目かを数えたりはしない。反復の感触により、最終階段はおのずと気づかれており、平面への移行の体勢がおのずと選択されている。

動作2

- ・ (3)力がこもっているかこもっていないかの感じ取りであり、平面から階段に移行するさいには、おのずと力の締め方が異なる。階段にも高さの違いがあるので、力の締め方にはアナログ的な調整がある。ところが「往々にして極度に力が入るかまったく力が入らないかの二分法になることがある。身体内感が欠落している場合、ある部分には極度に力が入り、他の部分にはまったく入らないことがある。(4)気づきは内感への反省的関与であり、内感に応じて、選択肢を開くために調整要因として関与している。これは内感を知るのではなく、実践的、行為的である。(5)地面や床の触覚性感覚は、柔らかい硬いだけではなく、足の裏がどの程度床を捉えているか、を感じ取るさいの指標となる。(6)身体力感とは別に、緊張(意識緊張を含む)の度合いがあり、反射反応によって、緊張-弛緩の間の両極を動くことになる。(7)快不快、滑らか-滑らかでない、自然-不自然無理-無理ではないは、感情、情感性にかかわる要素で、余分な恐怖感をあたえたり、余分な配慮をあたえたりする。

動作3

- ・ (8)動作の環境認知要素は、ほとんどが提督的なものであり、位置の指定(ランディング・サイト)、到達点の指定は、移動(世界とのかかわりの変化)の組織化に役立つ。風景の変化率(オプティカル・フロー)は、動作の方向と速度調整に役立つ。変換車の感知は、自動的な運動制御回路となる。物との接触は、物に到達するまでの速度調整、物に触れるさいの身体姿勢の予期制御、力感の予期制御に役立つ。(9)自分自身の動作のイメージをもちながら、動作誘導と動作制御に活用する。これは純粋に動作制御の変数を一つ増やしていることである。

動作の疾患

- ・ 動作の疾患は、筋断裂の場合でも、脳損傷の場合でも、身体内感の欠落が最大要因だと思われる。身体部位をそれとして感じ取ることができない、感じ取ろうとしても感じられない、感じるということがどうすることなのか分からない、緊張が強くなり感じるということが作動しない、感じられるところだけを無理に活用すると、セラピストからただちに注意を受ける。分回しでは、ごく一部の身体内感の残るところを活用すると力学的な振り回しになるだけである。脳疾患の場合、身体内感の再形成は、少なくとも5、6年単位の課題であり、必要な動作の形成に割り当てられる3か月、半年という治療単位とはオーダーが異なっている。セラピストから何が起きているのか、何が必要であるのか聞かされれば理解はできるが、それがどうする事なのか分からない。
- ・ またこれらは記憶の欠落ではない。感覚そのものの欠損は、二次的に多くの課題を誘発。動作訓練を行い、内感の欠落があると、容易には記憶に落ちない。翌日もその翌日も、また一から訓練の開始である。どこか局面で記憶に落ち始めるかは、いつも試行錯誤である。

動作の記憶1

- ・ 個々の動作訓練で、少しうまく実行できた、と感じる場合には、同じ動作の速度を変えることができるかどうか、どこに動作を遅くすることができるかどうか、遅くした場合に身体内感が感じ取れるかどうか、感じ取れば、1、2分置いて、その動作の感覚を想起してみる。内感がそれとして感じ取れるまでに、健常者で0.3秒程度かかる。この感覚が動作制御の手掛かりとなる。想起は、何かを思い出すだけでなく、思い出すことをつづけて経験を組織化し、経験の局面を変える。それによってその経験を記憶に落ちやすくする。想起とは内面化の働きである。記憶されたものと想起されたものが同じであることは、ありえないことである。意識とは、この場合書き込みまでの場所の維持の働きのことである。意識とはこの場合、隙間を開く働きのことである。
- ・ 健常成人の場合、過去の動作の感覚が残っていることが普通である。また障害後の動作の記憶のうち、うまく動作できないことの「感覚の記憶」、訓練が応えなかったことの「感情の記憶」のように、つねに余分な記憶に紡がれる可能性に付き纏われている。

動作の記憶2

- ・ 動作を行うさいに、過去の動作を想起するように促してみる。このとき何が想起されているかが、問題となる。昨日の動作の場面を思い起こしてくださいと言って、想起してもらうとき、何が想起されているのか、思い起こすさいに、何を思い起こしているのか聞くことも必要である。
- ・ 昨日の動作の像であれば、イメージの想起と同じで、動作の制御変数を増やしているだけになる。(知覚の過集中を解除する効果を伴う。動作には適度な無視が必要である。)
- ・ 動作の感覚(どんな感じ)を想起しているさいには、調整変数をさらに形成していることになる。変動幅の拡張、選択肢の細分化。
- ・ 動作にともなう緊張感がおのずと想起されている場合には、緊張解除が必要となる。この場合、意識は緊張-弛緩のラインに多くの段階を作り、緊張(集中度)を一つの調整変数として活用する場所である。

空間の記憶

- ・ 場所と位置の記憶(ランディング・サイトの記憶)は、移動動作にとって重要である。空間的指標の認知的指定は、通常健常者では自己と世界のかかわりの行為を組織化する。このかかわりの行為がなんらかの理由で形成されていない場合には、「ランディング・サイト喪失群」(人見真理)となる。成人疾患者では、「わかってはいるが、できない」状態である。
- ・ 位置の記憶というとき、何を想起しているのか、空間的な座標の位置の想起であれば、相対的な指標を想起しているだけである。その位置から見える風景の想起であれば、認知的パースペクティブを想起しているだけである。風景の変化、風景の移行の想起であれば、身体移動感に連動させることができる。眼前の特定の位置指定行為の感覚であれば、物や世界とのかかわりの想起である。

